

理念を高く掲げた英語を主軸にする統合科目の実践

大阪女学院短期大学副学長

智原 哲郎

ご紹介に預かりました智原でございます。今回はこうしたワークショップにお招きをいただきましてたいへんありがとうございます。先程の Semester 制のお話なども聞かせていただけたわけですが、伺っているうちに、大阪女学院でやって参りました事を思い出しておりました。

私どもといたしましては、いろいろな試行錯誤と議論を重ねてカリキュラムの改訂を行なったわけですが、その当時は、今、思い出すと、数え切れないほどの回数でスタッフとともに議論を重ねました。特に98年のカリキュラムの改訂の時は、それまでは通年制を敷いておりましたが、いきなり3学期制にしてしまうという事をやりました。まあ新潟大学はたいへん大きいので、それこそたいへんでしょうけれども、私どもは英語を中心に、英語を主としてやって行こうと英語科で手をつけられる所から入りましたし、学校全体が小さいので切り替えが早かったという事が言えると思います。決定も実施も手短かにできたわけですね。議論はたいへんでしたけれども。

今日お渡しした資料は、本当の事を言うと、見ていただく程のものかどうか心配ですけれども、3ページにわたって、今日お話しする事の目次です。その順番に話を進めて行こうと思っています。それからもう一つは、補助資料としまして、カリキュラムの「群」の解説、英語教育に関するアンケートの結果、もう一つ大きなA3の紙は去年から始めました新しいカリキュラムの科目と、科目が目指している事の小見出しを、デザインしてまとめたものです。

I. 「知の形成」を目指したカリキュラム

A. 学部/学科としての「専門性」と大学教育としての「普遍性」のかねあい

まず、我々の教育の理念というものが、どういうものを中心に据えたのか、それを据えるまでの経緯と、理念によって形成されたもの、実際にどういう風実践が始まり、またそのサポートシステムをどういう風に作り上げて行ったかという事があります。コンピューターでスクリーンに映してご覧いただきながら、話を進めて行きたいと思えます。

まず、皆様ご存じのように1991年に、設置基準が大幅に改正されました。その時、全国の各大学でいわゆる大学改革が行なわれたわけです。特に語学の関連の改革が、あらゆる所で議論され、求められておりました。特に何故か関西あたりでは英語で教育を変えて行こうという声が多かった。同時に大学とは何か、これでいいのかどうか、大学は本当に高等教育機関であったのかどうか、という話になったわけですね。すなわち、大学の専門性と普遍性というものの統合が、どれほど考えられてきたのか、あるいは実施されてきたのか、各大学が、問題意識を持った。学部教育とか学科教育とかいうものが高等教育であるという伝統的な考え方があるが、そういう考え方から離れて、学部とか学科とかいう範囲を超えて、大学教育としての普遍性を再認識しだした。実はその事に非常に意義があったのではないかと思います。

大阪女学院の前身はウィルミナ女学校と言いまして、いわゆる宣教師が中心となって設立された学校であります。1884年、明治17年の創立でありました。短期大学としては比較的后発であります。1968年に短期大学ができ、去年30周年を迎えました。

この間、数回にわたりカリキュラムを変えていったのでありますが、どういう風にしていったらいいのかと、試行錯誤を繰り返してきました。大学教育とはどうあるべきかという事があったわけです。そして今回の大きな改訂を迎えたのですけれども、その根底にあるのは、学部が持っているはずの専門性、私たちの立場で言えば、英語科、英語の専門性ですね。そして大学教育としての普遍性、その普遍性と専門性の兼ね合い、さらには、その事に教員はどう関わっていくべきなのかまで考える事が重要であろうと思ったわけです。その事が、新しいカリキュラムの根底にあったのです。言い換えればこの2点というのは、大学を改革したり、カリキュラムを改訂したりする時の原則、キーポイントであるのです。原則をまず考え、作ってみよう。それを抜きにしたままで、大学とは何か、大学教育とはどうあるべきか、などと考える事はできなかったのです。その理念を考えずに我々の作業は進められなかったのです。

B. 教育理念の明確化／共有化

私どもの教育理念なんですけれども、アレクサンダー・ヘールという宣教師が創立者で、彼と、1893年からだいたい20年くらい校長を勤めたアグネス・モルガンという人が、お二人ともアメリカ人ですけれども、その人たちが残してくれた教えがずっとありました。社会に積極的に関わる事のできる人間を育てる学校で、そういう目標や理念が、ちょっと有耶無耶にされていた時代がありました。今回のカリキュラムの改訂にあたって、はっきりと原点を見直し、はっきりと打ち出そうじゃないかと言う事になり、ステートメントとして作成しました。

本学の理念として三つの事が掲げられている。一つは、本学は基督教の教えによる教育共同体であるという事。二つ目として、その目指す所は真理の探究と、自己と他者の尊厳に目覚め、確かな知識と豊かな感受性に裏付けられた洞察力を備えるという事、三つ目が社会に積極的に参加する人間を育成する、社会に積極的に関わる人間を形成していくという事でありましたが、その最後の文がすべてを集約しています。そのための「探究」や、「目覚め」や「洞察力」を身につけてもらうために、教育の中に組み入れられなければならない、としている。ここに大学としての普遍性、「人間教育／人格教育」がこの文章の中に理念として表現されています。

先程申し上げましたように本学は30周年になります。そこで、この30年の英語教育を振り返ってみますと、まず最初の10年は、ほぼ、よその大学でも行なっているような英語教育でありました。言い換えますならば伝統的な英語教育であります。すなわち翻訳、日本語から英語、英語から日本語への変換といったような、昔からある部分的・構造主義的な教育でありました。学生はもちろん、どうやって英語を勉強したらいいのかわからないし、考えたりもしないので、先生の言う事を言われたとおりにやる。教員は自分で教材を作って自分だけの授業をやる。言い換えれば一つの授業が一つの国で一つの城、一人の教員が殿様であったわけです。どこからも文句を言われぬ、そのクラス担当だけの自由な時間だったわけです。1978年ぐらまでの10年ぐらまで、ほぼ10年間続いておりました。少なくともその時点では、我々は英語の授業や学生の英語能力というものをどの程度向上させられるのかを考えていたつもりでありましたが、しかしそれは、教員の側からは教員だけの一方通行の教育でありました。この時は英語教育とはどういうものであるかというコンセプトがなかった、考えられていなかった。大学側はどのような理念を持って英語教育をしているのか、その到達目標はいったい何なのか、その到達目標はどんなものであるか教員間ももちろ

ん、学生との、共通の認識はなかった。もしかするとそれは今もどこかの大学が抱えている問題ではないかと思えます。

私どものカリキュラムの改訂は1987年からでしたが、学内セッションという形で6年間を費やして討論を重ねて行った。ほぼその間におぼろげながらも英語教育の到達目標というものが必要であるという事が見えて来て、その事では合意に達しました。到達目標というものは日常会話ではなく、知的場面で英語が使えるようになる事を目標とすべきである。それから、英語教育というものは大学教育全体の一部をなし、従って、自分と他者との知的レベル/知的場面での伝達活動を成立させられるくらいの使える英語を身につける、そういう能力を育てる。つまり英語にどっぷり浸かって非常に無機質な英語を覚えるのが目的ではない。それが我々の一致した意見であるとなりました。それから3点目は、知識の総合化、主体化を計るカリキュラムを作成しようということでありました。

以上のような考えで1985年にカリキュラムの作成を開始いたしました。1987年に1年次から開始され、1988年にはすべてのカリキュラムの実施がありました。その後、いろいろな模索を重ねながらやって参りましたが、さらに次の段階に進みたいという事で去年から、カリキュラムの第2次改革という事を始めたわけです。そして今年から新しい体制が整ったと言う事です。

C. 新しい知の形成

「新しい知の形成」、たいそうな名前をつけたわけですが、これは3点に絞って要約されるのではないかと思えます。一つは自己としてのアイデンティティーの確立である。すなわち英語が好きで、英語をやりたいと思っている学生、そういう自分は何者なのか、自分は何をどうやって勉強していくのか考えてもらう。今流行の言葉を使うと、「自分探し」ができるようにする。二点目は、我々が受け入れている学生は、もう21世紀に入って生

きて行かなければいけない。21世紀に向けて人類文化が崩壊しかねない危機と課題の認識を持ってもらう、そういう目的をカリキュラムの中に盛り込んで行こう。三点目は、グローバルなレベルでの英語でのコミュニケーションがとれるようなレベルの英語教育の実現。この三つを、先程の「知の形成」と呼んでいます。これは、この三点を並列としてとらえるのではなく、三層になって一つに統合されたものと考えています。

21世紀の課題というものはいったいどのようなものなのだろうか、私どもは考え、議論を行いました。21世紀への課題の一つとして、どういう風に平和を確立し維持しようか、世界中で紛争は起こっている、それをどういう風に解決するのか、それを教えていこう。それから、科学技術と宗教の問題ですね。先端技術としての科学がどんどん発達している。人、つまり心とか宗教とかと、科学という事です。科学というものは17世紀に驚異的に発達した。その後も発達していて、どうも心の問題がそれについていけないのではないか。三つ目は人権です。私たち一人一人に人権がある。人権を認識する、これはますます必要になってくる。四つ目は環境問題です。生命の危機という事です。この四つをコアカリキュラムとして選びました。

このコアカリキュラムですが、どの大学の学部や学科の中にもいろいろな選択コースがあるわけですが、どれを選択してもこの四つを学ばせるようにしよう、カリキュラムの全体を通して2年間のうちに必ず学ばせよう、これが今回の新しいカリキュラムです。これまでの英語教育ですと、たとえ四つのコアを決めても、いわゆる英語科目の中でしかやらない。よって、各スキルを統合したもので学科目や学年を縦断してやっていこうとした。いわゆる一般教育科目と英語教育科目を並行させて同時に学生に学ばせようという新しい狙いがありました。日本語で行なう授業にも、もちろん理念とコアは生かされています。

これを実現するために、三学期制を導入して集中的に訓練する事によって、教育の効果を上げた

い。もう一つは、インターネットはやはり整備しなければならない。我々は二学年で800人ぐらいの学生を抱えておりますが、それをフォローするために200台のコンピューターを設置して授業の中で実際に使っています。そういう風な環境を整備して、それを使わなければ受けられないような授業にしたわけです。そういう環境を多く作って情報獲得の正確さを期する、そういう体制を確立しました。

D. カリキュラムの構造／ねらい

今回のカリキュラムの狙いと構造なんですけれども、新しいカリキュラムは、21世紀の社会に積極的に関わる人間の育成、これを狙って追求しているものであります。この骨子は今ご覧になっているように、21世紀への課題と国際化に向けた総合的なカリキュラムを用意・統合し、学科単位の全体を組み合わせるこれらの課題に対応できる語学力を育成していく事にある。それではいったいどんな科目が新しいカリキュラムにくっついているかという事ですけども、どういう科目がどんな群になっているか、科目群、A3版の資料を見ていただきますが、最後の「専攻科群」は、さらにもう1年学びたいという学生のために設けられている。「自己の確立群」から「表現コミュニケーション群」までの各群にいろいろな科目が張り付いている。これらの群とその狙いというものがある、これは学生に配っている学生要覧の解説のコピーですが、それを読んでいただければわかると思います。

II. 英語教育カリキュラム

A. 共有コンセプト

特に今日は英語教育の話をしていただいておりますが、全学のスタッフが、英語教育に関してのコンセプトを共有しています。これは少しだけキーワード的にお話しさせていただきますが、ま

ず、私たちの英語教育というものは、何度も申し上げましたとおり、「21世紀の課題に積極的に対応できる」、そういう語学力を身につける、コミュニケーション能力の育成、これが到達目標になっているわけです。当然の事ながら、我々がコミュニケーションをする時は、伝えたい事を読み、聴き、話し、書きしているわけですから、コミュニケーションは4技能すべてに関わるものであるという認識を持つ。バラバラではなく、車の四輪のように機能していかなければならない。まんべんなく力をつけなくてははいけない。

(1) スキルの統合化

私たちの英語教育というのは、いわゆるスキルトレーニングを越えた英語教育であるということです。ですから、それまでやっていたような「読む・聴く・話す・書く」という四つのスキルを別々に訓練するものではなく、四つの技能を同時に訓練していこうという形を取っております。これは、87年度の第1次カリキュラム改訂の時から変わっておりません。この根拠は、まず第一に、英語を知るという事、英語つまり言語の構造を知るという事と、言語を使うという事とが、今まであまりにも同一視され過ぎていたのではないかという疑問があります。その結果としてどういう事が起こったかと言いますと、知性の訓練、すなわち日本語への置き換えの作業ですとか、言語についての知識すなわち文法に重点を置き過ぎてきた。けれども、言語の構造を知ると言語を使うと言う事とは必ずしも一致いたしません。また自動車の例を引きますが、自動車の内部構造を熟知していたとしても、実際に自動車を動かす事はできない。今までの英語教育というものはあまりにもその自動車の内部構造を知る事に重点を置き過ぎていたのではないか、そこに反省があった。

それからもう一つは、別々にスキルを訓練していくという事は、先生方はご存じのように、1950年代最初の頃でしょうか、構造主義言語理論というものが盛んでありまして、それによりまして、言語というものは細分化できるものだ、その

細分化されたものを個々に訓練していけば、最終的にそれを集めたら言語能力になるのだ、そんな理論がもとになってこれまで行なわれて来た。読み・書き・話す・聴く、それから語彙などいろいろな部分を個別に訓練する事をやっていたわけで、それさえやっていれば、学生は最終的には、英語能力・まあ言語能力ですね、そういうものを身につけられるんだという事で考えられておりました。

ところがその後の理論なんかによりますと、個々の和は全体以上のものであり得るのであると。例えば、私はテニスが好きなんですけれども、テニスが上手くなるためには、もちろん個々の動き、つまり腕の動き、足腰、筋力、足の動きですね、そういうものを鍛えなければいけないわけですが、それぞれ個別に鍛え、訓練したからといってテニスが上手くなるわけではない。それぞれに鍛えたものを同時に使えるように訓練されて、総合的に使えるようになって初めてテニスは上手くなる。言語も同じ事が言えるのではないかなと言う事です。「読み・書き・話す・聴く」を同時に訓練して使わせながら言語を習得してもらい、それがより効果的な言語教育と呼べるものなのではないかなと思うわけです。

また、我々の実際の言語活動を見てみますと、読む事ならば読む事だけという言語活動はあんまりしていない。必ず複数のスキルを使って実際の言語活動をやっています。ですからやはり言語教育におきましてそういう事を考えますと、それぞれのスキルを別個に訓練していくのには、一見効果的のように思えますけれど、限界があると思われれます。

(2) 「会話」から「対話」/内容重視

言語による意思伝達、コミュニケーション能力をつけさせるという事でしたけれども、コミュニケーションといいますと、送り手が受け手に情報を伝えるという事ですけれども、私たちの所の英語教育のコンセプトといたしましては、単に情報だけを伝えるだけというのではないんだ、我々が学生に望んでいるのは、情報だけではなくて、自

己自身の内容を伝えなきゃいけないんだ。単に非常に表面的な情報を伝えるだけならば、それは、いわゆる「英会話」という形になってしまうのではないかな。我々は学生に「知的対話」をやってもらいたい。英会話ではなくて知的対話をやってもらいたい。そうすると当然我々のやる授業は内容を重視しなければいけません。先程挙げました四つのコア、この内容によって学生に知的対話をしてもらおうというわけです。

(3) アウトプット重視

もう1点は、アウトプットを重視すると言う事です。これも、我々の今までの反省から、ややもすれば、教員が一方通行的に情報を与え、授業を通して言語の知識の情報を与えて来ました。これは前提としましては、インプットをどんどん与えてやれば、学生は教室の外でアウトプットしてくれるだろうと、そういう思い込みがあったんです。これは日本の実状といいますか、現実を見れば、一步教室の外へ出れば、日本語以外の言語を使う機会はあまりありません。非常に当たり前の事です。ですから、このインプット/アウトプットの関係ですが、インプットしたものは必ずアウトプットされなければなりません。そうでなければ英語の力は身につかないわけです。留学をして帰って来るとしっかりと英語が身につけているという学生をよく見かけますが、もちろんそれは、むこうにいれば、日本にいる時よりもインプットされる事が計り知れないくらい多いわけですが、同時に見逃してはならないのはアウトプットの多さです。インプットとアウトプットのバランスというものが自然にある。実は、それを考えなければいけない。ですから教室の中でも、インプットされた事ができる限りの時間を作って、できるだけ多くアウトプットをさせなければいけない。これが我々英語教育担当者の間ではすごく重要であると考えられました。ですから教室内のディスカッションはもちろんの事、サマリーを書かせたり、論文を書かせて、さらにそれを発表させたり、いろいろな機会と方法で教室内のインプットとアウ

トプットのバランスをとる事を盛んにやっております。これは今流行の言葉で言うと、「発信型の教育」、学生主体の教育であるという事です。やはりここに挙げているようなコンセプトを持ってやらないとなかなか我々が目指しているような英語教育は難しいのではないかと思います。

B. 科目構成／ねらい

(1) 語学統合群

Integrated Units (一年次)

それでは具体的にどのような科目があるのか、どんな授業があるのかと言いますと、資料にあります、「語学統合群」と呼んでおりますが、1年生と2年生が必修で行なう科目であります。1年生の方は「Integrated Units (統合課程)」というのがあります。これは「Reading」と「Discussion」と「Academic Writing」、週2回、1回70分授業であります。それから「IU基礎」というのは、日本語で行なわれる授業です。これが先程ちょっと申し上げましたアウトプットのための授業です。この四つの科目がある一定の期間、あたかも一つの科目のように動くというのが1年次の「統合課程」と呼んでいるものです。ちょっと分かり難いかも知れませんが、お手元の資料にも載っておりますが、各5週間ずつそれぞれのトピックが動きます。最初のトピック「平和の追求」が5週間、二番目のトピック「科学と宗教」がやはり5週間。それで一学期が終わる。残りの二つが二学期に入ってくるという形になります。それぞれのコアが5週間ごとに設定されているわけです。もう一つですね、やはり留学希望の学生というのがどうしても出てくるわけです。対応してやらなきゃいけない。それぞれのトピックが論理展開法と対になっています。例えば、「平和の追求」ですと「例証」と「過程」の二つを学ぶようになっている。

この四つのトピックを私たちが教えようとする、なかなかいい教科書がないんです。この四つのトピックに関して読む・聴く・書く・話すの内容の入っているものを私どもが自前で、すべて作

り上げました。ですから特徴と言いますと、たとえば「平和の追求」でしたら、「例証」と「過程」の論理展開法を学ぶわけでありましてけれども、学生がReadingのクラスで読むものは、必ず「例証」と「過程」を使ったものを読むという事になります。ですからリーディングしながらでもライティングに必要な、スピーキングに必要なものを学んでいるという事になるわけです。

具体的に、クラス展開の方をお話ししようと思うんですが、今、1年生は13クラス展開です。これは、習熟度別に編成されているんですが、5つのレベルが設定されています。1クラス平均30人くらい。一つのトピックを5週間でこなすという、時間的にはかなりきついところなんです。これをこなして行かなければ、課程はうまく機能しません。

このサイクルは、それぞれのトピックの最初はReadingから始まります。担当の教員はまず、この「生命の危機」というのを例にとってみますと、「生命の危機」というものはどういうものかという簡単な説明から入ります。それから、テキストのエッセイの「説得」の展開の説明をします。さらに学生はDiscussionへと移っていくわけですが、Discussionのクラスは、レクチャー方式で「生命の危機」についてインプットをやります。次にAcademic Writingのクラスに行きますと、Readingのクラスで簡単に説明されましたエッセイの展開法をさらに詳しく担当の先生が、例をいろいろ挙げながら説明していきます。次に、Readingのクラスで、学生は「生命の危機」についてのエッセイを読んでいくわけです。

「IU基礎」というのは週に1回です。ここではReadingで扱った内容について、今度は日本語でさらに広く深く先生は講義する形になります。ですから、学生の方は英文でのインプットと「IU基礎」における日本語のインプットでもって実際に英語でディスカッションをやる。アウトプットですね。さらに最終的には、5週間が終わるところで、Academic Writingのクラスで、「生命の危機」という自分で考えた内容で自分のエッセイを仕上

げる、そこにたどり着くわけです。

ディスカッションとかライティングのクラスで、「何々について書きなさい」と言われても、背景知識が入っていなければ、学生はディスカッションできませんし、エッセイは書けません。いわゆる「スキーマ」が入っていなければ、うまく機能しないわけですから。我々は、今までは英語でのみのインプットだけで教えていました。しかしやはり、ディスカッションとかライティングは十分とは言えなかった。それが今回のカリキュラムでは、より多くの学生の発言、ディスカッションがあったり、より良いエッセイに出会える事になったのです。学生は5週間は、どの授業でも、「生命の危機」なら「生命の危機」以外の事は考えなくていいわけです。そればかり考えていたらいい。その利点は凄いです。今まででしたら、授業、先生によって、色々なトピックがあって、1週間に5日受けるとすれば、学生は全部のトピックについて考えなければならなかった。頭が混乱するくらいに。思ったよりもボキャブラリも増えない。この統合課程というのは集中してできるメリットがある。

実際にどういう内容のものを取り上げているか、「IU基礎」ではどんな事を先生がレクチャーしているかなんですが、今、ご覧いただいているようなものです。これらのものを取り上げて、とにかく学生に深く考えさせようとしているわけです。ユニット1では新生が統合課程に初めて出会うものですから、パラグラフで導入しますので、少しトピックが多いんです。

Topic Studies (二年次)

以上、ざっとであります。一年生を概観したわけですが、二年次になりますと名前も、ReadingとかWritingとかいうものがなくなっています。Topic Studiesが出てきます。これは3科目ありますが、それぞれ2コマずつあります。1年次と2年次の大きな違いは、この合計6コマ、週に6コマという事になりますが、学生はその3倍、4倍を教室の外でやらなくてはいけない。

特に Topic Studies の I と II はですね、我々がクラスを作りました時はアメリカの大学の授業をイメージしておりました。Topic Studies I と II は、ほぼ目的は同じです。興味分野トピックへの知識を深めるわけですが、1年生の時に先程の四つのコアをまんべんなくやりました。学生は2年生になりますと、特に自分はこれをやりたい、ここを専門にやりたいというものを一つメジャーなコアとして決めます。それぞれ Topic Studies の I と II から最低一つずつ選んでやっとなきゃいけない。自分が選んだトピックの知識と理解を深めなきゃいけない。それから基本的なリサーチテクニックを学ばなきゃいけない。選んだコアの領域について非常に高いレベルのものを要求している。まず自分で調査をしなくてはならない。自分のメジャーとして選んだコアについて、学生は図書館で調査をして来る。それからインターネットで検索をして来る。それを授業の中でオーラルプレゼンテーション、口頭発表しなくてはいけない。ディスカッションが行なわれる。そして最終的には、感想文ではないちゃんとしたリサーチペーパーを書かせます。最低5枚。全員です。学生は Topic Studies I と II で、1年間にどのクラスにいましても20枚以上は書かなければならない。ですから、先程申し上げましたように、授業の外でやらなければいけない事が核になっているわけで、学生は自主的に調査をし、まとめをし、発表しなくてはいけない。そういう体制を作ったわけです。

1年生と2年生ともに教室の中では英語でやるトピックは同じですから、習熟度によってクラス分けをしていますから、下の方のクラス、特に1年生はちょっときついわけです。ですから、レベルに応じてアプローチや教材の量を考えてやります。量で差をつけています。使う教材は、下のクラスでも使えるといったような易しいものは選ばない。上のクラスでも下のクラスでも同じものを使う事が学習の動機づけに大切な事である。2年生の場合は、1年生でもうやって来ましたから、レベル的には Advanced と Intermediate の2つです。

Topic Studies II では、より専門的なリーディング

をさせるという事で、そこがポイントになっています。週2回で10週間です。1週間でほぼ20ページくらい読ませますから、10週間で200ページくらいになりますね。いわゆる大学用に作られた日本の教科書、教材は使わない。できるだけ現地「英語圏」で実際に使われている教科書を使う。あるいは実生活で使われている新聞・雑誌そういう物を教材として使う。そういう風に英語担当の先生には承知してもらっております。

担当している先生には、専門分野、興味分野のコアを選んでもらい、その中から担当するテーマを考えてもらっています。例えば、文学の先生は文学がもちろん専門ですが、「平和の追求」をテーマにしてもらう事になるとすると、平和学が専門ではないですね。そうしたらどうするかというと、「シェイクスピア」を通して平和を教えるという事をやってもらっております。文学系の先生は「現代と人権」の所はかなり入っておられます。そういう風にいろんな所で活躍していただいております。ですから、教える方も自分の専門分野の所も教えられます。非常に興味を持ってやっていただいております。

それからトピックスⅢのクラスです。ここに書いてあります通り、海外放送を通して21世紀の課題の認識を深める。世界への視野を広めていく。ここでのトピックは、実は毎週変わります。衛星放送からのニュースを使っております。今、世界で起こっている政治・経済を中心としたニュースをトピックとして使います。毎週、担当教員が教材を作成しております。流れをお話ししますと、このクラスは週2回あるものですから、最初はイントロダクション、次がレビュー、それで1週間のトピックを終えていく。まず、学生はLL教室に入ります。この授業は予習というものがないのでできません。準備はいりません。いきなり聴き取りです。今回の新しいトピックを提示されます。「あまり深くなくていい、細かい所はいいから、全体がどういう事を言っているのか、とにかく聴きなさい」という形で入っていく。だいたい2分半くらいのニュースを使っております。今日は過

去に使ったものを持ってきましたので、ちょっと聞いてみてください。

※ 2000年問題のビデオ ※

最近では時事英語を教材に使われている大学が非常に多くて、あまり目新しい事ではないのですが、私どもは遅くとも二週間遅れくらいのニュースを使っております。ですから、まあ、同時性の高さを狙っています。ニュースは2・3回提示しますが、その時に難しいと思われる単語を選んだ「Vocabulary List」を配ります。ボキャブラリは習熟度でかなりの違いがありますが、単語の定義を英語で提示しながら理解させる。「Comprehension Questions」も作ります。だいたい12個くらいですが、学生に解答させていく。12個通してやればニュースの内容がわかるようになっております。これが、イントロダクションの時間です。そして次のクラスまでの宿題を出す。どんなものかと言うと、学生はLL教室の時は必ずカセットテープを持ってこなければいけない。で、音声を録って帰ります。一つ目の宿題は、音声をすべて書き取ってくると言うもの。一言一句、最大漏らさず、とにかく書き取ってくる、わからない所があっても、自分で作文してもいいから、とにかく書く、みたいな感じでやります。とにかく毎週やる。習慣づけですね。二つ目の宿題は、このニュースに関する英字新聞、これはだいたいA4サイズ1枚分くらいですけれども、これを教材として用意しておきます。これを読んで理解し、英語でサマリーができるようにと言って渡します。三つ目は、このニュース、このトピックに関する「Discussion Questions」をもとにディスカッションができるように準備してくる、以上が宿題です。

で、次の授業に臨む。まず最初に、ディクテーションのチェックです。先生は、ニュースのスク립トをゆっくりと読み上げる。学生は隣の人のものと交換し、チェックします。15分くらいかかります。教師はそれを回収し後程確認する。それが終わりますと、英字新聞のサマリーをさせます。残りの時間はディスカッションです。それから、毎回5分くらいの小テストをやります。3種

類あり、一つは「Review Quiz」、ニュースに関係した音声による質問が流れて来ますから、これを聴き取って答えるもの。それから「Vocabulary Quiz」。そして英字新聞の中から問題を出して、リーディングを確かめます。

毎週ですから、担当の先生の準備もかなりたいへんです。全クラス同時に行なわれていますし、先程も言いましたように、このクラスは目新しさが大事です。ニュースは新しくないと学生は興味を持ちません。つまり、先生にとって準備のための期間が短いわけです。

我々が政治・経済を主に選びますのは、今の学生は、気にしないですね、政治・経済は。「新聞読みますか」と聞くと「読みません」。読めばテレビ欄から。そういう学生たちですから、授業の中で強制的にやらせるしかありません。それが功を奏しまして、アンケートなんか採りますと、アンケートも後で覗いていただきたいと思いますが、それなりの効果は出ている。自分たちから興味を持って、進んでニュースを見たり、読んだりし始めたらしい。英語の聴き取り能力も上がっている。

(2) コア展開群

それから2年生ですが、「コア展開」。1年生は先程、英語の科目に日本語の科目がくっついていると言いましたが、2年生はコアの Topic Studies に直接関係はないですけれども、四つのコアの中からメジャーで選択したトピックを、今度は日本語でやっていかなければならない。これが「コア展開」と呼ばれているものです。いろいろな科目が張り付いております。その中には最低取らなければいけない必修のものも含まれております。それ以外は選択して取っていく事になります。「平和」関係は専門の先生に来ていただいて、国際関係なんかの講義をしていただいておりますが、それぞれ専門の先生をお願いしております。こういうものが「コア展開」ですが、2年生になっても、英語でも日本語でも同じものを学生に学ばせて行こう、スキーマのアップが目的です。

(3) 語学基本群

我々のカリキュラムは「英語を学ぶ」のではなくて「英語で学ぶ」ものです。語学基本群を通して、英語で学べるように直結させたいと思っています。「音声学」と「英文法」は1年生の必修です。それ以外は最低3科目が選択必修になっています。学生によってはここのすべての科目の単位を(選択科目として)取って卒業する事が可能なわけです。

Note-taking の仕方を学ぶ「Academic Listening」、大学レベルのボキャブラリを増やしていく「Academic Vocabulary」、それから、速く読むという事がこれから求められる事になって行きますので、これはもう私どもは8年くらいやっておりますが、コンピューターを使っての速読の訓練である「Computer-Assisted Speed Reading」。同じくコンピューターを使って、英作文、英語の表現を学ぶ「Computer-Assisted Composition」。スピーチの仕方を学ぶ「Public Speaking」。実際に英語で演じさせて英語の表現方法を学ぶ「Drama」。それから、自分の考えを英語でエッセイに書かせる「Creative Writing」。それから、これもコンピューターを使っておりますが、英字新聞を自分たちで作らせてまして、英語による記事なんかを書かせる「News Writing」。文学作品などをじっくり読ませる「Intensive Reading」、「音声学」の「アドバンス版」である、文学作品などを解釈させ朗読をさせる「Oral Interpretation」。これらはそれぞれの学期にちらばっておりますから、学生は好きな時に自由に履修できるという形になっております。

III. プログラム運営と周辺サポートシステム

A. 英語教育担当者ネットワークシステム

実際に今まで私が申し上げて来ましたようなクラスを、どうやって運営していくのかという話がありますが、まず、「英語教育担当者ネットワークシステム」というのがあります。それぞれの英語の必修科目に、例えば1年生ですと Reading、

Discussion と Writing、それに Phonetics と Grammar も入っておりますが、これらが必修科目です。それから、2年生の Topic Studies の I・II・III ですね。この8科目にすべて「リエゾン」というのを張り付けています。内わけは、ネイティブスピーカーが4人、ノンネイティブスピーカーが4人の8人がそれぞれのコースのリエゾン、橋渡しの存在として張り付けております。さらに、一年生の5つのクラスは同じクラス、同じ学生なんですね。ですから先生はもちろん、5人入っているわけですが、特に「Integrated Units」というのは、教師間の連絡がものすごく必要になってきます。ですから、3人、Reading の先生と Discussion の先生と Writing の先生の3人は常に Team Meeting というのをやらなければならない。その中に必ずチームリーダーが決まっています。例えば a のクラスならそこに1人のチームリーダーがいるわけです。専任がチームリーダーになる事に決まっています。チームリーダーがクラスで問題になっているような事ですね、例えば Reading の問題があれば Reading のリエゾンにその問題を伝えるとかですね、そういうネットワークを作っておくわけです。我々はリエゾン8人とコーディネーター・全体の責任者ですね、これは私がやらせてもらっていますが、このメンバーで徹底的にミーティングをやるわけですね。常にどういう問題が起こっているのかを出し合い、話し合うわけです。次の年に変えられるものなら変えて行こうというように、常に小さなミーティングを持っている。このシステムは非常に機能しております。特にネイティブスピーカーの場合は、責任感を持たせることになりまますから、このリエゾンに張り付いたネイティブは非常に良くやってくれています。問題があったりすると、積極的に他の先生にそれを伝え、何が問題なのかを話し合い、情報を交換し、解決法を見つけて行ったりを実際にやっています。

私どもの英語科目は1年次は5科目13クラス選択。2年次は3科目15クラス展開になっています。ですから、この体制ですと教員数がものすごくなるわけですね。どうしても非常勤の先生を

多く呼ばなければいけません。我々のスタンスとしては、専任も非常勤も、立場とやる事は同じなんだという事です。我々の非常勤に対する要求は高い。そこで、必ず新学期の始め、3月の終わるか4月の始めに、英語の担当者全員に集まってもらいます。担当者のワークショップ・オリエンテーションをやるわけですが、一日がかりです。さらに各担当のクラスの小さなミーティングをしてもらいまして、もう一度我々の教育や英語教育の在り方や理念のおさらいをしてもらいます。どういう形で今年自分たちがやらなければいけないのか、ガイドラインを必ず検討してもらいます。

B. 英語教科ガイドライン冊子の作成

ティーチングプランとか評価の方法ですとか、すべて決まっております。これは、我々が同じクラス、どのクラスでも学生に公平に授業を受けさせたい、評価を与えたい、そういう考えでどういう風に教えて行ったらいいのかとのプロセスがすべて決まっております。評価の方法ですと、論文で何%、教室での評価が何%と、すべてのガイドラインが決まっています。これをもとにして、専任・非常勤すべての授業が進んで行きます。教員共通の決まり事で、教え方、範囲と量みたいなものですが、これも先生方への課題として決められています。

伝言板で授業スケジュールの確認もやります。何月何日までにはどこまで教えておいてもらわなければならないというようなものです。ですから、大阪女学院で教えるのは非常に窮屈だと思われがちなんですが、複数の大学の非常勤をやっておられるある先生が言っておられましたが、とてもきついですけれど、やり甲斐があるそうです。

学生の方もやり方が全クラス共通であると知っているものだから、よく見えています。ちょっと気を抜くと、あの先生はちゃんと授業をやってくれない、とすぐ言います。他のクラスと同じ事をやっているはずなのに、あの先生はこれこれこういう具合に、授業をやってくれない、となる。

学生が疑問に思うわけですね。で、先生も手を抜くわけにはいかない。ですから、非常に緊張感のある授業が毎日続いていくわけです。先生が10分遅れて教室に入って来た、10分早く授業をやめたなんて事はございません。きっちり守る。それを学生も知ってますから、学生の遅刻も少ない。

C. トライメスタ制の導入

それからトライメスタ制の導入、3学期制を導入いたしました。10週間単位です。英語に関する科目と必修科目に関するものが週に2回ですから、非常勤の先生にも週2回は来てもらわなくてはいけない。週2回ってのは大変なんですけど、大阪のど真ん中にうちの学校はあるものですから、まあ、来てもらいやすい。それで確保できているわけですが、英語に関しては、必ず週2回です。日本語のコアでは先生の都合で1日に2コマも仕方ないわけですが。

3学期制導入は、英語を短期間に集中して行なうという特徴があります。語学関係ではですね、集中してやった方が、効果が上がっていいだろう、と、間に夏休みを入れたりしないで、6月の末で10週間終わってしまおう、そういう形になりました。

それから、卒業保障です。それまでは通年制でしたから前期に単位を落としてしまうと、すぐに3年目の留年が決まってしまうわけです。私どもの所は、非常に要求度がそれこそ高かったですから、去年の卒業率は80%切りました。すべてのクラスに出席制度があります。1/3休むとアウトになります。ですから3年目に残る学生が多かった。いっさいの"下駄"は履かせない。そういうシステムになっております。その代わり私どもは開学以来、3年目からの学費を取っておりません。3年いても4年いても、同じ2年間分の学費しか払わなくていい。これは、一つにはベストの状態になって卒業させる。つまり、2年でとにかく卒業してしまう事が、必ずしもいい事じゃないんですよ、と。学生が3年かかっても4年かか

ってもですね、サポートして、ベストの状態卒業してもらおう。そうは言ってもなかなか、3年もかかると弱気になる学生もおりますので、3学期制にして、冬の学期はいっさいの必修科目を入れておりません。選択科目がすべてです。ですから、春・秋学期に落とした科目を、冬にもう一度チャレンジできる制度を作りました。

もう一つは学習への積極性、自主性ですけれども、3学期制にする事によって学生は、一学期間に受講する科目数を減らす事ができます。ですから、その科目に集中して取り組む事ができるわけです。そういう意味でのプラスが、3学期制にはとてもあります。冬学期は必修科目を入れておりませんから、学生はどんどん選択科目を自分で取っていく事ができますし、私どもは短期の留学ならば休学せずに送り出してやれる。ですから、極端に言えば、春学期と夏学期に苦勞して単位を取ってしまえば、1年か2年の冬学期はまるまる空ける事ができるわけですね。その冬に学生はいろいろな事にチャレンジできるわけです。ですから、私たちは学生たちに常に選りなさいという事を言う。自分で選りなさい。どうしたら自分に一番いいのか考えなさいと言っています。

D. ヘッドスタートプログラム

2年間のこれほど厳しい英語教育を普通の形でやっておりましたら、なかなか学生は続きませんから、「ヘッドスタートプログラム」、新入生用なんですけど、事前学習-4月に入学するまでの学習、入学してからのオリエンテーション、これが非常に重要だと考えております。まず、推薦とかで合格が決まっている新入生には、あらかじめ、私どもの方から、宿題と言いますか、これだけは読んで来て、これだけは勉強して、4月に入学してくださいよ、といったものを渡します。渡すものは、「Integrated Units」の話の中では「平和」というものがありましたけど、「平和」に関する読み物です。日本で手に入るものをリストにしておいて、最低でもこの本は読んでおいてください、あと、ビデ

オのリストをつけます。映画関係ですが、四つのコアに関した映画で、こういうのを観ておかれたらいかがですか、それから、入学する前に四技能の準備の仕方みたいな事も伝えます。

オリエンテーションですが、以前は2週間かけてじっくりとやっておりました。3学期制に変わりましたからは8日になりました。8日の間に、なぜ大阪女学院なんですか、なぜ英語なんですか、と問いかけ続けます。どんなことをやるのかというと、我々の英語教育についてじっくり話しをします。8日間のうちの3日間、これは二つのグループに分かれるわけですが、1泊2日のオーバーナイトの研修をやりまします。その間にじっくりと英語教育について話しをします。それからパネルディスカッションなんかをやりまして授業内容はどういうものなのかわかってもらう。それから、トレーニングとしてどういうものを行った方がいいのかなどという質問もありますから、それに答えたりする。こんな事前学習を充分やるという事ですね。4月の最初のクラスの始まる前に、学生としてのベースを作るという、これも大切な事だなと考えております。

E. 習熟別クラス編成

習熟別クラス編成もやります。1年生13クラスですが、5つのグループに分けます。これは我々独自の標準試験がありまして、入学式のあと、翌日ですね、試験をやりまして、プレースメントをやりまします。2年生になりますと、新たにプレースメントします。ですからクラス編成は1年に1回となります。

F. 「アウトプット」の場の提供

1. 教科と結びついた各種コンテスト

「アウトプット」の話ですが、教室の外のアウトプットも大切なので、1年生には二つのコンテスト、2年生は一つのコンテストをやっています。1年生の場合はユニットのI「平和の追求」が終

わった後で学生に平和に関するダイアログを作らせます。内容のあるダイアログを作らせ全員にやらせます。で、クラスで一番よかったペアを選んで、クラス代表のコンテストをやるんです。全学一同に集まりまして、それぞれのクラスのダイアログを披露してもらいます。これもちょっとテープがありますので、聞いていただきます。

※ ダイアログ ※

それから、私どもは音声学、つまり発音にもすごく力を入れております。相手に通じなければいけないわけですから。その音声学のクラスで、英語の歌を使って発音矯正・練習をしています。学生に自分たちの歌いたい歌を選ばせます。クラス単位です。自分たちで振り付け、自分たちで指揮をし、自分たちで伴奏をし、音声学の先生は、発音を矯正して英語の歌の合唱コンテストをやりまします。これもちょっと聞いてみてください。

※ 合唱 ※

たいへん生き生きとやってくれてます。大変な中にも授業の外で、こういう風に集まって練習しなきゃならないんですが、積極的にやってくれます。もう一つ、お見せするのは、2年生の「プレゼンテーションコンテスト」です。これも全員にやらせます。そして、クラス代表でコンテストをやりまします。

※ プレゼンテーション ※

2. 地域研究

それから地域研究と言うのがあります。これはオーストラリアやアメリカなんかでやっているんですが、我々の短期プログラムは、単に語学研修ではないということです。やはり英語で学ぶ、そういうものがありますので、それぞれの所で、実際にリサーチをして、発表し、英語を学ぶと言うそ

ういうものなんです。実際に英語で全てをやらせる、そういう地域研究を組んでおります。

G. 教育効果の測定

この2年間のカリキュラムで、どの辺のレベルになっていくんだと言う話になると思うんですが、計る方法は二つあると思うんですね。学生はどんな風にどこまで伸びたのか、英語能力がどれだけ伸びたのか。実際の2年間の変化ですね。もう一つは、学生がそれぞれの科目をどのように理解しているか、学生からの評価ですね。この二つがカリキュラム編成によるカギということになると思います。

先に、学生による評価の方から話をしますと、資料として1998年度の学生アンケートを入れておきました。まず、一つ目の Integrated Units の方ですね、一年生というのは、大学生になっていきなり、平和とか科学とか宗教とか、少し重いものをやるわけですね。ちょっととまどいを感じられます。秋学期の方が、春学期より理解を示している%が高い。「学生は英語能力はどのように評価しているか」ですが、「読む」と「書く」は比較的自分で伸びを実感しやすいわけですね。ところが「話す」になりますと、なかなか伸びたとは考えてくれない。我々教員の方から言わせれば謙虚過ぎると思うんですが、学生は納得していないわけです。

二年生の Topic Studies のアンケートですが、IとIIです。これはなかなかプラスに評価しています。ディスカッションの量と言うのが、クラス内のディスカッションの量が多すぎると言う、消極的な評価ですね。それから衛星放送を使った Topic Studies III の授業なんですが、これはかなり学生の満足を得ています。

で、これらのアンケート結果は、ほぼ、この10年間、同じ傾向を示しています。ほぼ毎年この辺りの数字が出ています。

それからですね、学生の伸びの方の話をちょっと最後にさせていただきたいと思いますが、私の

専門領域がテイスティング法ですので、第1次のカリキュラム改訂の時に独自のテストを作りました。やはり、いいカリキュラムを作るには、いいテスト、それも独自のテストを持たなきゃいけないんです。これは、もう必須なのではないかなと思います。TOEFL との相関関係がかなり高い結果が出ています。それで、我々のテストで、ほぼ TOEFL の点数を予想できる所まで来ました。新しいカリキュラムについては、これからですが。我々の学生は卒業時には、ほぼ45%の学生が TOEFL500点に近い成績の相関になっています。

ずっと、長い話につきあっていただきました。とてもお疲れの事と思います。やはりですね、ここまで私どもやりますのに非常に大変でした。いろいろな事がありました。いろいろな事も言われました。試行錯誤で、全学的にみんなが協力してやらなければならないカリキュラムだったわけです。さあ、これからまだ、やはりもっといいものを作りたい。今、3学期制ですが4学期制にしたらどうかという話も出ております。まだ、今後の課題がたくさんあります。

なぜ大学の授業はおもしろくないのかなんて、よその大学の話を耳にしたりいたしますが、おもしろくないから授業に出なくていいかという議論もあります。ただ私たちには、「学ばせる責任」というのが、これはあるわけです。学生に対して、君たちには学ぶ責任があるんだと言っているだけではいけない。いいカリキュラムを作ってあげて、学生主体のカリキュラムをこちらがちゃんと作ってあげて、初めて、学ぶ責任があるんですよ、と言えるわけです。それをやらなきゃいけない。学生が満足できるようなカリキュラムをやっていくしかない。ただ、学生に容易に妥協するような事はしない、強い態度で臨まなきゃいけない、それだけは私はいつも心に留めて授業をしております。長時間ありがとうございました。